

倉方俊輔

「悪」のコルビュジェ
第2回・罪作りの延命

無重力感に取り囲まれる。それはクライアントがフランスに根を持たず、独身者で、多くの要望を出さなかったことと見合っている。しかし、決してそうした与条件から自動的に導き出されはしない。つくり上げたのは、創造者としてのコルビュジェの意志だ。

それは重力に抗した、あるいは物語性を持ったドラマとして構築されていない。どこから見始めても構わない面、色彩、立体の構成である。ここで言う立体とは実と虚(ヴォイド)の両方のこと。エントランスホールに突き出た階段が、吹き抜けというヴォイドへと貫入しているのに気づくだろう。2階の渡り廊下は透明な長方形をなし、ガラス越しに曲面の外壁が外部空間をへこませているのが分かる。その内部のスロープは上がっても下がってもいい。飾られている絵画がさまざまな見え方をしたのを思い出しはしないか。

この空間で「図」と「地」は同時に規定されている。ある形状をキャンバスに置いた際に残余の形も決まるのと同じだ。画期的なのは——[p.2.3に全文掲載]



光嶋裕介「コルビュジェのある幻想都市風景《ラ・ロッシュ・ジャンヌレ邸》
～Urban Landscape Fantasia with Le Corbusier (Maison La Roche)」